

---

# CCさくら 短編集

琥珀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CCさくら 短編集

### 【Nコード】

N43560

### 【作者名】

琥珀

### 【あらすじ】

CCさくらの短編集です。時間軸はバラバラです…。主に「さくら×小狼」（または小狼×さくら）です。更新は、不定期です。感想なども、お待ちしております！

## 手をつなごう(前書き)

すんごく短いです。

小狼が香港から帰ってきて二週間ぐらい…かな？  
もっとたってるかな…？

## 手をつなごう

さくらと小狼は今一緒に下校中です。

そんな中、さくらは小狼にある「お願い」を、してみる事にしました。

その「お願い」は、今までしたかったけど、出来なかった「お願い」……。

「しつ小狼君！あの！」

「ん？どうした？さくら」

さくらに呼ばれ、小狼は振り返った。

すると、さくらがいつもと何かが違う事に気づいた。

「さくら？どうし……」

「あの！……あのね？」

小狼の言葉はさくらに妨げられる。

さくらの頬は、僅かに赤く染まっていた。

「あ、ああ？」

そのことに気づいた小狼は疑問符を浮かべた。

同時に少し首を傾げる。

さくらは少し俯いていた顔を上げた。

「……………手…繋がらない？」

「…え！？」

さくらの突然の申し出に、小狼は一気に真っ赤になった。

「あーやつ、やっぱり良いの！はっ恥ずかしいよね！」

さくらはそれを拒絶ととったらしく、笑いながら首をぶんぶん振った。

小狼はそれを見て、少しうつむいた。

心臓がバクバクいつているのを感じつつ、少し唇を噛む。

スツと短く息を吸う。

「……………なら……………」

「え？」

ぼそり、と聞き取れないぐらい小さな声で、小狼が呟く。  
うつむいていたさくらは小狼の顔を見ようと顔を上げた。

「……………さくら……………なら……………良い」

小狼の顔は耳まで真っ赤だ。

これ以上無いんじゃないかというくらい赤かった。

さくらは目を見開く。

「…ほっ、…ほんと!？」

「…あ、…ああ……………ほら」

そう言つてそっぽを向きながら、ぶっきらぼうに手を出す小狼。

さくらの顔がパアツと花が咲いたように明るい笑顔になる。

「ありがとう!小狼君!」

さくらは嬉しそうに手をとった。

「あのね?小狼君」

「ん？」

「これからは毎日手を繋ごうね!」

「!?!?!?!」

さくらは満面の笑顔で笑い、小狼は再び真っ赤になった。

一緒に遊ぼう！

小狼が友枝町に返ってきて一ヶ月が過ぎたころ・・・。

さくらと小狼と知世、千春や奈緒子や利佳、それに山崎のいつものメンバーは、みなでお昼ご飯を食べていた。  
場所は中庭だ。

「ねえねえ！知ってる？」

千春が口を開いた。

「何を？」

さくらは首をかしげる。

「知ってる？」ではよく分からない。

他のみんなも疑問符をだしている。

もちろん、山崎意外、だったが。

「あのね！前にいった温水プール覚えてる？」

「あ！あの五年生の時の？」

さくらはすぐ思い出したようだ。

「そう！」

千春がパアッと笑う。

「クリームソーダ美味しかったね　！」

「うんうん！」

「すっごく面白かったし！」

「そこがどうかされましたの？」

他のメンバーもすぐに思い出したようで、女の子達は盛り上がる。

山崎はニコニコと見ていた

小狼は（ああ・・・あの・・・）と、お弁当を食べながら思い出している。

「あそこがね！来週リニョーアルオープンするんだって！」

「わあ　　っ！本当！？」

「そうなんだ！」

「行ってみたいね　　！」

「リニョーアルオープンっていうのはね　　」

「嘘はいいの！」

いつものやりとりにあはははは・・・と、みんなで盛り上がる。

「新しくなっただって事か？」

小狼がそう言うのと、

「そうだよー。それで・・・」

と山崎が説明しようとして（嘘を言おうと）するが、

「でね、すっごく素敵なんだって！」

と、千春が嘘を言わせない。

それはいつもの事なので、みんな気にしない。

するといえば「さすが千春ちゃん！なれてるねー」というものだ。

「へえ　　！」

「すごいな・・・」

さくらも小狼も感心して興味を持っていた。

「ね！李君も帰ってきたし、みんなで行かない？」

そんな千春の提案にもちろんみんなは、

「そうだね！」

「賛成！」

「楽しみだねー！」

と答える。

「じゃあ来週の日曜日に行こー！」

「・・・」　「おお　　！！！！」

みんなは期待に、そしてわくわくに

胸を高鳴らせた

## 背中（前書き）

これはまだ、小学生の頃のお話です。



## 背中

なんだろう…？

とつても気持ち良い…。

あつたかい…。

すごく安心する…。

ぱち。

さくらは目を覚ました。

「あれ…？」

「目、覚めたか？／＼／／」

耳の近くから声がする。

「りっ李君！？」

その正体が小狼だと分かり、さくらは驚きの声をあげた。

「どうした？」

「わたし…ほえ！？何で李君におんぶされてるの！？」

さくらはやつと気づいた。

そう。さくらは小狼におんぶされていた。

「お前、カードを替えて、そのままおれに倒れこんだんだ。

そのままにもしとけないし、ケルベロスが運ぶ訳にはいかないからな」

小狼が事の事情を説明をする。

理由が分かり、さくらはとりあえず納得した。

「そ…そっか…。ありがとう。ごめんね？」

「べつ別に…！／＼／／」

かあああつ！と赤くなる小狼。

これで自覚が無いのだから、ある意味すごいだろう。

「もう平気だよ？下ろしてくれて…」

さくらがそう言うと、

「ここまで来たんだからついでだ。送ってく。」  
と小狼はそのまま歩き続ける。

「えっ！でも…悪いよ」

「だ…大丈夫だ／＼／＼」

小狼はそう言ってそっぽを向くと、さくらを背負いなおした。  
さくらは、小狼の優しさを感じた。

しかし、女の子としては、少々気になる事もあった。

「でもでも…重くない？」

「え？なんだって？」

しかし小狼には聞こえ無かったらしい。

「あっえっと…！何でもないの！」

「？」

小狼は疑問符をだす。

「…ね、李君」

「なんだ／＼／＼」

「…ありがとう」

さくらは小狼の背中に顔をくっつけて目を閉じる。  
すると小狼の鼓動が聞こえた

李君のおんぶかあ…。なんだか恥ずかしいけど、

すっごくあつたかくて…、

すっごく気持ち良くて…、

すごく…安心する…。

雪兎さんやお兄ちゃんやお父さんとはなんか違う…。

きつと…李君だから…だね…。

わたし…李君と仲良くなれて、良かった…。

小狼の心音が子守唄のようで、さくらはそのまま眠りについた…。

背中（後書き）

うわ…／／／／

なにこれ…！ハズ…！！！！

なんか仲良すぎでしょうかね？

うたた寝にはご用心！

ぽかぽか…。

うとうと…。

暖かい日差しが窓から差し込む。

ゆっくり、ゆっくり、眠気を誘う…。

小狼はさくらの部活が終わるのを待っていた。

なぜなら、今日は小狼の所属するサッカー部がお休みなのだ。

「…はあ…」

小狼はため息をついた。

しかし！

「でもこの教室は日が入ってきて暖かいし…。

（さくらの部活もみれるし…）…たまには…いいかもな／＼／＼」

小狼のいる1 - 3の教室からは、いつもは見られないさくらの部活姿が見られる。

それはそれで良いかもしれない。

しばらくはほおずえをついて見ていたのだが、さくらは小狼に気付くと、

笑顔で「小狼くん！」と手を振ってくるものだから…。

「な…っ！さ…さくら…っ！／＼／＼（恥ずかしいだろ！）」

と真っ赤になった。

そして、小狼も小さく手を振る。

その顔は無意識だが、優しく微笑んでいた。

その顔にさくらは、

「！！（はにゃんもおゝ あんな顔…反則だよゝゝゝ／／／／）

ゝ  
とはにゃん状態になった（笑）

「？さくらの奴、どうしたんだ？」

しかし小狼は当然の如く、全く気付いてはいなかった…。  
はたから見ればただのバカップルだ。

この二人は時々こうなるのだ。

それから小狼は見ていたのだが…、

ぽかぽか…。

うとうと…。

「ん…ふああ…」

暖かな日差しが小狼の眠気を誘った。

「でも…さくらが来たら…」

小狼は最初こそ抵抗したが、眠気には逆らえず…。

さくらは小狼を待たすまいと廊下を急いでいた。

そして1-3のドアを開けた。

「小狼君、ごめんね！待たせて…ほえ？」

さくらが教室に入ると小狼は腕を枕に眠っていた。

結構大きな声だったし、ドアもガラツと開けたのに起きないとは…。

そうとう良く眠っているのだろう。

さくらはそっと近づいた。

「…待たせちゃったな…ごめんね？」

さくらはそつと誤る。

「でも、こんなによく眠ってるってことは、疲れてるんだよね…」  
さくらはそう思うと、胸が苦しくなった。

「また、遅くまで仕事してたのかな…」

小狼は李家の次期当主。

遠く、日本にいる今だって、その事に変わりには無い。

だから、小狼は若くして、いろいろ書類があつたり、  
付き合いがあつたり…、仕事があるのだ。

「無理しちゃって…」

さくらはつぶやいた。

「…さくら…」

その時、小狼が寝言を言った。

「…!!…小狼君…」

さくらはとても嬉しくなった。

さつきまでのもやもやが、嘘みたいに消えていく。

小狼の夢に自分が出ているのだ。

そして、夢の中でどんな事してるのか…と想像して、夢の中の自分に嫉妬してしまった。

そんな自分に苦笑いした。

「…かわいい」

さくらはそう思った。

いつもはキリツとしていて大人っぽい彼が、とても幼く、あどけない寝顔を見せている。

しかし、なんだかもやもやするものも生まれた。

「…こんなとこで寝てたら…誰かに見られちゃうよ…」

他の人には…見せたくない

さくらは小狼を起こす事にした…が、

「そうだ…！今なら…」

誰も見てないことを確認して、小狼に顔を近づける。  
…そして

…ほっぺに、きず、してみた。

しかし、すぐに離れる。

「わっわたし何やって…！／／／／」

小狼はまだ眠っている。

安心したような残念なような…。

「そうだ！」

さくらはまた何か思いついた。

「えへへ…あまりこーゆー事ってできないもんね」

そう言つて小狼の頭を撫でた。

髪は思つていた以上に猫っ毛で、やわらかかった。

日が当たつて少し光っている。

「小狼君の髪…すぐくやわらかい…！…えへへ…新発見／／／／」

さくらがそんな事をやっている間に小狼は覚醒へと向かつていた。

「（今…頭になにか…）」

小狼はそんな事を考えていた。

「ん…？」

「ほっほええ…！」

さくらはパツと手を引つ込めた。

「あれ…？さくら…？」

「う…うん…／／」

小狼はハツとした。

完全に目が覚めたらしい。

「ごっごめん！おれいつの間にか寝てて…！」

小狼は慌てて謝る。

「いいいい今来たばかりだから大丈夫だよ！／／／／」

さくらはぶんぶんと首を振った。

「…良かった…」

「（ほえ〜〜〜；；；）」

さくらは内心ヒヤヒヤだった。

「そういえば…なにか頭に…」

さくらはギクツとなる。

「気のせいだよ！ハハ；」

「あと…なんかほっぺに…」

さくらはギクギクツとなる。

そして、

「小狼君！！」

と叫んだ。

「！！なっ何だ？（びっくりした…；）」

「帰ろう！」

「あ…ああ…。そうだな。帰るか」

「（ほえ〜！／／／きききす…しちゃったとか！

頭なでなでしちゃったとか！い、言えないよう〜！）」

「さくら？」

「なっ何でもないの！」

「そうか（ニコ）」

「！！／／／／（はにゃ〜んもう〜！ずるい〜！

／／／／どきどきしすぎて…心臓もたないよう〜！！！！）」

小狼に自覚はありません。

「あ、そうだ！」

「どうした？」

さくらはにこつと笑った。

「小狼君。寝顔、かわいいね！」

「な　　！！！！／／／／」

今度は小狼がどきどきする番？



## ちょっとお知らせ

私の書く中学生小狼は李家の次期当主として、実にいろんな新しい技を習得しています。その技を紹介します。

### 召喚・攻撃魔法

地龍将来 雪空将来 熱風 風雪 雷柱

炎柱 水柱 緑木草 呪縛でも使える 樹

### 呪縛・操り魔法

雷呪 炎呪 風陣 水陣 呪

### < 双方呪縛法 >

炎雷呪 風水陣 風炎呪 風雷呪 炎水陣 水雷陣  
呪炎地

熱雪呪 呪雷地 雷雪呪 地風陣 風雪陣 地雪陣  
水雪陣

他、これらをさらに応用した三方呪縛法なども。

## 特殊魔法

時<sup>とき</sup>

時<sup>じくう</sup>空

呪文が長い

式<sup>しきがみ</sup>神

靈<sup>れいこん</sup>魂

思<sup>しねん</sup>念の剣<sup>つるぎ</sup>

陰<sup>いん</sup>

陽<sup>よう</sup>

眠<sup>みん</sup>

空<sup>くうふう</sup>風

翼<sup>よくえん</sup>炎

物<sup>ぶつ</sup>質<sup>しつ</sup>探<sup>たん</sup>知<sup>ち</sup>

記<sup>き</sup>憶<sup>おく</sup>操<sup>そう</sup>作<sup>さく</sup>

## 防御・治愈魔法

治<sup>ちゆ</sup>癒

結<sup>けつ</sup>界<sup>かい</sup>

特<sup>とく</sup>殊<sup>しゆ</sup>治<sup>ち</sup>癒<sup>ゆ</sup>

浄<sup>じよう</sup>化<sup>か</sup>

今の小狼の魔力は以前と比べて数段高く、さくらと同じか、少し劣るくらいです。

他にも技のアイデアあったら下さい。

この子李家次期当主なのでいくらでも作れちゃうんですよ^^

声を聞かせて（前書き）

久しぶりの投稿です。

甘い……のか？

いや、甘くはない……と思います。

まだ遠距離恋愛の時の話です。

声を聞かせて

早く…。

早く7時にならないかな？

…早く、早く…。

胸がドキドキして、そわそわして、落ち着かない。  
落ち着けないよ。

毎週土曜日の夜7時は、とっても特別で大切なの。  
だって、小狼君とお話できるから。

香港にいる小狼君と電話できる。  
小狼君の、声が聞ける。

…まだかな、まだかな。

もう少し。あと少し。

もうちょっと。あと1分。

早くお話がしたい。

声が聞きたいよ、小狼君。

カチ    コチ    カチ    コチ

…携帯電話はずっと無口。  
ピクリとも動かない。  
どうしたの？もう7時だよ？  
いつもはピッタリに鳴ってくれるのに。  
お話できるのに。  
今日は……無口。  
…小狼君…。

……  
…もう、8時だよ…。  
小狼君、どうしたの？  
何かあったの？  
まさか、風邪！？  
事故とかじゃないよね！？  
誘拐とか……！！  
…もしかして、電話するの、イヤになっちゃった…？

……  
…9時に、なっちゃった…。  
もうわたしからかけちゃおうかな？  
迷惑かな…。

……小狼君……！！

泣かないって、決めたのに。

小狼君が帰って来てくれるまで、

絶対、泣かないって。

なのに

たった、たったこれだけで、目頭が熱くなった。

わたし……もう……。

！！

来た……！！

）  
）

バツとすぐに携帯を手取る。

携帯から、わたしの大好きな声が聞こえた。

「小狼君っ！」

『うわっ……！すごいな。コール一回』

どうしよう。

涙が出てくる。

『ごめん！遅くなって……！し、仕事が色々ごたごたしてしまって……！

今まで母上と話し込んでいたんだ……！………本当にごめん……！』

電話の向こうで頭を下げているのが簡単に想像できて、少し笑った。  
やっぱり、小狼君は優しいね。

「うん、いいの！かけてきてくれただけで嬉しいっ！」

『そ、そうか…。…その、元気…か？』

「うん、元気だよ…。お仕事忙しいのに、かけてきてくれてありがとう！」

『えっ？あ、いや、別に…。た、ただ。お前の…』

お前の？

電話の向こうで慌ててる声が聞こえる。

「あー」とか「うー」とか「えっと…」とか。

『だ、だから…。その…。お、お前の…。こ、こ…。…声が…。…だ。』

…。その…。えと…。ど、どうして、も…。…聞き、た、く  
て…。…』

あ……。…！

小狼君も…。…そう思ってくれてたんだ！

『迷惑かと…。…思ったんだけど…』

「そんな事無いっ！！そんな事無いよっ！わたしも…。…わたしも  
声！

小狼君の声が、すっごくすっごく聞きたかった！お話したかった  
の！」

『えっ…。…あ…。…そ、そう、か…。…うん…。…その…。…えっと。  
おれ、頑張る。だから…。…だから…。…』

お前に…。…さくらに、待っていて欲しい…。…』

「…。…うん！さくら、頑張って待ってるよ！小狼君が帰って来てくれ  
るの、ずっと、ずっと待ってる…。…！」

『ありがとっ…。…さくら』

安心したような声が聞こえた。

「あのね？小狼君」

『何だ？』

「わたしね…、小狼君が、大好きだよ」

『なっ……………！！？う……。……………お、おれも…、だ……………  
大……………好き、だ……………』

ふふっ。

きつと、小狼君真っ赤だね。

小狼君、照れ屋さんだから。

でも、そんなところも大好きだよ。

「……………じゃあ……………またね？」

『……………ああ……………またな』

「葛鈴ちゃんにも、よろしくね？」

『ああ。そっちも、大道寺とか、山崎とかによろしくな』

「うん。……………おやすみなさい」

『……………おやすみ』

ピッ……………。

「……………小狼君……………」

本当は、もっとお話したいよ。

「……………うん！パワー充電！……………大丈夫。

待ってるよ、小狼君。……………わたしは、元気だよ！」



二人が再会するまで、後もう少し…。

あの、春の風吹く、桜の下で…。

## 小狼の悩み事

「うーん…」

小狼は悩んでいた。  
とてつもなく悩んでいた。

（さくらの誕生日プレゼント…何が良いんだろう？）

そう、一週間後は小狼の一番好きな人である、木之本さくらの14歳の誕生日。

実は小狼、1ヶ月前から考えているのだが思いつかない。

知世に相談しても雪兎に相談しても莓鈴に相談しても、返ってくる答えは

「小狼が渡すものなら何でも喜ぶ」というものだった。

山崎に相談すると嘘を言うてくる。（そして騙された） 去年談

桃矢やケルベロスなどには絶対に相談したくない…。

したとして、まともな答えは期待出来ないし、ケンカになるのがオチだろう。

しかし……、何でも良い、と言われても小狼は困ってしまう。

小狼からしてみれば、やはり一番喜ぶものをあげたい。

それで悩んでしまうのだ。

…いや、知世からはもう一つアドバイスはあった…が、

（でっ出来る訳ない！！！！／／／／／それに…やっぱり形に残った方が良いし…）

ぶんぶんと小狼は首を振った。

「あ…。」

小狼はふと、あるところを思い出した。

「…あそこには行っていないな…行ってみるか」

小狼が向かった先は…、

カランカラン

「あら、李君。いらっしゃい」

「こ、こんにちわ」

「ゆつくりしていつてね？」

「は…はい」

ここは…ツイン・ベル… どうしてここに来なかったのか…。

小狼は自分を恨んだ。

小狼はお店の品をじい…！と見て考える。

ちなみに女の子たちが小狼を見ては頬を染めたりしているのだが、小狼は全く気づいていない。

「あ…！」

一品、小狼が目をとめた物があった。  
それはさくらの気に入ると思われる物。

「……よし」

小狼はそれをレジに持っていった。

「あの…！これ下さい！」

さて、小狼が選んだ物とは？

## 小狼の悩み事（後書き）

あゝ…。

本当は25日にUPしたかったのに…。

とりあえず、さくらの誕生日の余響（？）小説です！

## さくらの幸せな一日

【三月三十一日】

「じゃあ明日、九時に迎えに来るから」

「うん、ありがとう！また明日ね？」

「ああ…。また明日」

さくらは小狼に送ってもらい、家の前で明日の約束の確認をした。そして帰っていく小狼の背を見つめていた。

『さくらの部屋』

がちゃっ

「よっ、ほっ、はっ！おっ、さくらっ！お帰りっ！ほっ！」

ケロちゃんはゲームをしながら言った。

…が、

「はにゃん」

さくらはそう言ってベッドでごろごろし始めた。

ただいま、という言葉など頭からすっぽりと抜けているようだ。

「なんやさくら。どないしたんや？」

そんなさくらに気づいたケロちゃんは、ゲームを中断してさくらの元へと飛んだ。

「明日ねっ！小狼君がわたしの事、お祝いしてくれるんだって！楽しみだよ〜」

さくらは頬を赤く染めて、更に早くゴロゴロし始める。その様子から、とてもウキウキしている事が伺えた。

「恋する女の子はホンマよう分からんで…」

ケロちゃんのはあ…と呆れたため息をはいた。

「小狼君…。早く明日にならないかなあ…／／／／」

## 【四月一日】

ピンポン…、とチャイムが鳴り響く。

さくらはすばやく反応した。

「あ！小狼君だ！」

階段を駆け下りるさくら。

「ホンマ時間ぴったしやな…」

ケロちゃんは小狼の生真面目さに、呆れたように呟いた。

「小狼く…お兄ちゃん!」

さくらが玄関を見ると、睨み合う（というより桃矢が一方的に睨んでる）小狼と桃矢がいたのだった。

「あっ!」

今の小狼の目には、さくらは救いの女神に映っただろう。

「ごめんね？小狼君…。お兄ちゃん！小狼君睨んじゃだめ!」

さくらは軽く兄を睨んだ。

「…ふん。さくら、五時には帰って来いよ？うちでだってやるんだからな」

「五時            !!?? もう少しいでしょー!？」

さくらはあまりに門限が早いため抗議したが、

「だめだ」

桃矢はバツサリと切り捨てた。

「なによお兄ちゃんのケチ！行こ！小狼君!」

「え？あ…ああ」



「おい」

出て行こうとするさくらと小狼を呼び止める桃矢。

「なんだ」

「さくらになにかしたら…」

「（ぞくっ！）」

小狼は悪感を感じた。

「いつ行こう！」

「？うん！」

やっとさくら達は小狼の家へ向かった。

『小狼の家』

小狼の家に付き、さくらと小狼のプチパーティーが始まった。  
やはり派手に飾り付けてあるということは無いが、テーブルにはお  
手製料理が並んでいた。

「あ、あの」

「なに？小狼君」

さくらには小狼に呼ばれ、小首をかしげながら振り向いた。

「…その……お誕生日…おめでとう。………」さくら

小狼はふわりと笑って言った。

「……ありがとうっ！小狼君！」

さくらは花が咲いたような笑顔になった。

「あ、……これ」

小狼はピンクの包みを出した。

「わあ……！！ありがとう……！」

さくらは大事そうに受け取ってプレゼントを抱きしめた。

「開けてもいい？」

「ああ」

かさかさ……。

その包みは意外にも少し重かった。  
ドキドキしながら開けていく。

「……！！オルゴール……！……素敵だね……」

さくらはうつとりとそれに見入った。

それは撫子の花に藤の花、桃の花、そして桜の花が彫られているオルゴール。

そして、あともう一つ

「このオルゴール、好きな模様を彫ってくれるやつなんだ。」

「そうなんだあ……！撫子の花はお母さん。藤の花はお父さん。桃の

花はお兄ちゃん。桜の花は私。…そして牡丹は小狼君だね！」  
「あ…ああ…」

小狼は顔を赤くしてそっぽを向いた。  
オルゴールにはもう一つ。

### 牡丹の花

「ありがとう…！わたし…これ絶対絶対大事にする…！とっても嬉しい…！！聞いてみよっか！」

「ああ。そうだな」

ねじを回してふたを開ける。

すると、聞こえてくる優しいメロディー…。

「…本当に素敵なプレゼントだよ…！！」

「あ、そうだ…」

（大道寺に言われたこと…やればもっと喜んでくれるのか…？な…  
…なんかすごい恥ずかしいけど…こいつが…喜ぶなら…）

…あつ、あの…！」

「小狼君？」

小狼はさくらを見つめた。

とても優しく、まっすぐな瞳で。

それでもやはり少し頬を染めて。

するとさくらはその瞳がきれいで、恥ずかしくて、でも嬉しい。  
そんな気持ちになる。

…無論、小狼は気づいてないが…。

「…さくら」

名前を呼ぶ。

「な……に？」

さくらが答えると小狼は、

「……その……だから……。……おれは……さくらが……好きだ！」

好きだ

「嬉しい……」

さくらは嬉しさのあまりか感動か、ポロリと涙を流して笑った。  
小狼は真っ赤だったが、その笑顔に更に赤くなった。

「わたしも……わたしも、小狼君が大好き……」

二人はふわっと、はにかみながらお互い笑った。

「さ、さあ。ケーキ食べるか」

「うん！！小狼君！」

二人とも顔も赤くて恥ずかしそうにしていたが、とてもとても幸せな誕生日になった。

「小狼君のお誕生日には、わたしから『好き』って言うね！」  
「ええっ！？／＼／＼」

## さくらの幸せな一日（後書き）

さくらの誕生日記念小説です！

うっわぁゝ、はずかしい！

これどこのバカップルですか！！？？

さくら！誕生日おめでとう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4356o/>

---

CCさくら 短編集

2011年5月10日21時44分発行